郷土史 ていね
第67号
平成 25 年 7 月 10 日
手稲郷土史研究会会報

第86回(平成25年6月12日)定例会の研究発表要旨

「龍馬一族」の北海道移住

前田　川崎 吉充 氏

〈阪本龍馬〉が、生前蝦夷地を目指していたその決定的証拠資料として、「勝海舟」の日記と、〈印藤聿〉あての手紙の外に、「お龍」の証言があるが、彼女を取材した記者が、〈川田瑞穂〉であり、後に漢学者となり、終戦時の玉音放送（大詔）の草案者である。

〇〈龍馬〉亡きあと、北海道に移住した一族は、両家とも直系の血縁が絶え、長姉の嫁ぎ先〈高松家〉の血縁によって相続されているが、流石に〈龍馬〉の血を引いている移住者だけに、總じて気骨あふれる足跡をのこしている。

〇なかでも、つとに名を成した、本家5代目の「坂本直寛」、8代目「坂本直行」は別として、7代目「坂本弥太郎」は、〈龍馬〉の遺品を纏め、昭和6年「京都国立博物館」に寄贈したが、その功績は大きい。その中には、「乙女」にあてた、かの有名な「日本を今一度せんたくいたし申候」などの手紙が含まれている。移住した一族の持ち歩いた遺品の全てが、北海道から〈龍馬〉が暗殺された京都に移動したことになり、まことに感慨深い。

〇〈龍馬家〉4代目「直道」は、「本家」の長男で、一旦本家6代目を継いだものの、父「直寛」の勧めもあり、長く途絶えていた〈竜馬家〉を相続し、再興に貢献した。

（昭和16年4月）戦前満鉄の要職を歴任、政治家とも交流があり、戦後鳩山一郎率いる「日本自由黨」結成時に相談役として、重要な役割を果たしている。

〇現在、〈龍馬家〉は、男子「直臣」が生後1ヶ月で夭逝、長女「寿美子」さんが5代目を継ぎ（在東京)、〈本家〉は「坂本直行」の長男「登」氏が9代目を相続（在東京)、「龍馬」のイベント、講演などで活躍中である。

〇参考本

好川之範著「坂本龍馬 志は北にあり」身近な参考書として好評（北海道新聞社発刊）

〇北海道移住後の坂本一族の墓

中央区南4西27 西側「円山墓地内」

〇浦臼町立郷土資料館（11月～4月休館）

「龍馬」ゆかりのコーナーあり

第 86 回(平成 25 年 6 月 12 日)定例会の研究発表要旨

開拓期の手稲の養蚕と開拓の村の養蚕の演示活動

前田　濱埜 静子 氏

養蚕は、中国で 5000~6000 年前からはじまる。日本の養蚕が産業として確立したのは、江戸期以降で近代日本の経済を支えた花形産業である。ほとんど唯一の輸出産業として重要な地位にあった。その当時、製糸女工は、過酷な労働を強いられはしたものの、貧しい農山村の婦女子にとってはあこがれの職業ともなった。そうした製糸業は、底辺のひろがりに依存して展開した。

北海道に養蚕が導入されたのは、1853（安政５）年に八王子の桑園を亀田郡大野村七重に移植した事から始まる。

○1869（明治２）年に開拓使が設置、開拓使は 1875 年中央区北１条西 8~9 丁目に養を設置、また旧酒田藩主によって南１条以北、西に桑が植えられた。

○1911（明治 44）年にわ養蚕農家は 7687 戸、桑畑は 3766hal に達したが、その後逐次減少し 1969（昭和３４年）には北海道の養蚕農家はほとんどなくなり、明治４４年頃がピークで札幌より空知地方に移っていった。

○現在の養蚕農家は、群馬、福島、埼玉、が主要産地となっている。

下手稲の養蚕の歴史は歴史年表、明治２２年上手稲、下手稲小学校の実業家養蚕を仮設（6月１３日）があるのみで、その他として明治２２年、「北海道タイムスの新聞」　下手稲小学校生徒に養蚕の実習を伝授。郷土誌「がる川」1984（昭和 59）年 11 月 25 日発行一ノ宮博昭さんの記録。　郷土誌　「まえだきた開校 10 周年記念事業協賛会」平成 6 年 7 月 31 日発行、学校でも高学年の子供に養蚕を教えたこともありました。とある。

開拓の村と養蚕は、明治 34 年高知県から浦臼に移住し蚕種の製造と養蚕普及に貢献した田村忠誠が建てた蚕種製造所が移築されており、開拓の村では平成元年より、この建物内で蚕を飼育。　開拓の村が「蚕の飼育」を行う意義は、来村者に対して開拓期の養蚕農家の暮らしの理解を促すとともに、人間がその営みを維持して行くための生産動物、「家畜」としての蚕を理解してもらうことにある。

開拓の村での蚕の飼育期間は、毎年７月下旬から８月中旬で、生産された繭は、ボランテアにより糸繰りの実演や伝統遊具つくりの材料、繭細工に加工して活用している。またその他に、 ボランテイアの活動としては､蚕について｢研修｣､桑樹の手入れ、蚕具の製作、飼育の準備、飼育、などを行い来村者に解説活動も、行っている。

次回の予定

次回（8 月 7 日）は、菅原直氏の「北海道への移民 ～ 私の家族史」と谷川一弥氏の「手稲１万歩あるく会~歩いて知った手稲の歴史」の研究発表を予定しております。

会場は、視聴覚室です。